

お米と笑顔という宝物を

真幸中学校 二年 永田 梨緒菜

「私、おじいちゃん達の作るお米大好き。」私は、毎年稲かりの時期に一人胸を躍らせている。私のおじいちゃん達の作るお米は最高においしい。おじいちゃん達は、

「無農薬のお米はうまいぞお。おじいちゃんの自慢のお米だ。」
というのが恒例になっている。

私は、中学生になり部活動に入った。練習試合や公式戦のときは必ずおにぎりを口にはおぼる。試合前のおにぎりは勇気を与えてくれる。試合後になると私は、試合中おにぎりを食べたい苦痛に恐れる。でも、私はどんなときでもおにぎりが好きということには変わりがない。おじいちゃん達の作るお米には、たくさんの感情がたたきこまれている。

私が小学一年生の頃の秋。おじいちゃん達のお米は、虫のえさになってしまった。おじいちゃんはそれでも無農薬にこだわる。私達に安全なお米を食べて笑顔になってほしいいつも田植えのときにつぶやいて一本一本の苗を大事に植えている。私はおじいちゃんから、
「この一本一本の苗が大切な命なんだぞ。」

そう言われながら育ってきた。だからこそ、おじいちゃん達のお米が虫のえさになってしまるのがすごく辛かった。おじいちゃん達も絶望的な表情をしていた。おじいちゃん達の笑顔が失われ、胸がズキズキ痛んだ。もう終わりだろうと思った。が、そのときだった。おじいちゃん目の色だけが変わった。そこからおじいちゃんは無農薬米大作戦が始まった。おじいちゃん達は必死になって無農薬米大作戦に取りかかった。おじいちゃん達の合言葉は、

「笑顔とお米を取り戻すぞ。」

になった。私はただただ嬉しくて胸がいっぱいになった。おじいちゃん達の自慢のお米を取り戻してお腹いっぱい食べて私の笑顔でおじいちゃん達を笑顔にできる日が早く来ないかと心待ちにする。

ある日、おじいちゃんから電話があった。急いで来てほしいという電話だった。私は、髪を結ぶのも着替えをするのも忘れてとっさに玄関をかけぬけた。おじいちゃん達の田んぼの上をトンボがくるくと飛び回る。おじいちゃん達は、私に

「おいしそうだろ。無農薬のお米はうまいぞお。おじいちゃんの自慢のお米だ。」

また、笑顔がよみ返った。私は、涙が出そうになった。

私は、おじいちゃんのお米が世界一大好きだ。そして、おじいちゃん
の笑顔も世界一大好きだ。おじいちゃんのお米と笑顔は私の自慢
できる、そして、誇りある宝物だ。無農薬でここまでおいしいお米を
作ることができるおじいちゃんは、秋になると私を呼ぶ。

「おいしいぞお。無農薬のお米はうまいぞお。おじいちゃんの自慢の
お米だ。」
と。

私には、将来の夢がある。農家ではないけれど。私の力でたくさん
の人を笑顔にできる職業につく夢がある。私は、大きくなってもおじ
いちゃんのお米をたくさん食べて、私の宝物を守り抜いていきたい。
お米と笑顔という大切な宝物を。